1992-19

「THIS IS 読売」第3巻第4号通巻第28号（1992年7月号） pp. 270-287 読売新聞社

# 思想は命がけの産物だ

## 日本人はなぜ生み出せないのか

橋爪　大三郎

思想とは、単なる知識ではない。見ばえのよい知的ファッションでもない。言葉という手段を用いて、自分を新たに発見しつづけるための、命がけの跳躍だ。

## 1　構築物としての思想

思想とは何だろうか。

人間の思考の産物が、思想であるには違いない。人間は、ものを考える。そして語る。我々の日常は、思考の産物で満ちあふれている。

けれども、このようにただ考えられただけのものを、思想とは言わない。

思想とは、人びとの営みを支える堅固な枠組みのこと。人間が考えついたものごとのうち、時間や空間を隔てて、繰り返し使用に耐えるだけの耐久性をそなえたものを、思想というのである。

思想とは、人間を守り人間をよりよく生かすための、思想の構築物にほかならない。

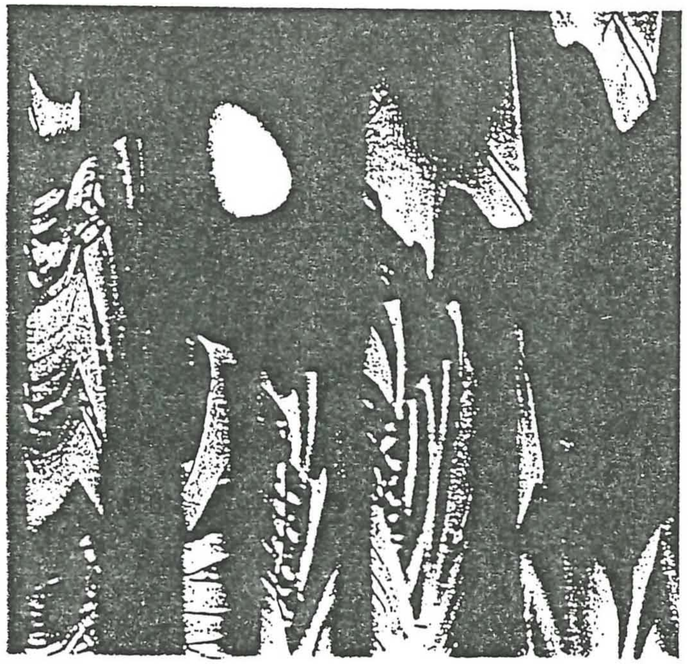
＊

歴史上、いくつもの文明が生まれては滅びていった。文明は、多くの人びとを動員するための枠組みを持っている。それは、宗教であったり、法律であったり、文字や官僚機構や、その他の文化的装置であったりした。それらの枠組みはみな、最も広い意味での思想であった。文明の興亡とはとりもなおさず、その文明を支える思想の興亡にほかならない。

ところで、我々の生きる日本はいま、現代の最も進んだ文明のひとつに数えられるに至っている。この社会は、古くからの日本の伝統を下地に、西洋近代文明から多くの果実を取り込むことによって、形づくられた。

この社会もまた、何らかの思想の結実であるには違いない。しかし、この社会を支える思想のどれだけが、我々みずからの手によって生み出されたものだろう。そのごく一部ですら、自分たちの手で作り出したものだとは言えない。

どんな思想も、どこかよそよそしい。まるで借り物みたいな感触がある。我々はまだ、自分の足取りで、思考を思想に高めるという経験が、圧倒的に不足しているのである。



イラスト・秋本　兼治

編集後記

◇橋爪大三郎さんの日本における思想についての考察は、過去と現代の思想状況を腑分けしながら、自前の思想創出を阻む社会の構造的欠陥を鋭く抉り出している。この論文は、氏の近著にも収載される。梅原猛さんのものともども掲載が延び延びになり、お二人には大変ご迷惑をおかけした。（と）

日本はなぜ、知的言論を生み出すことが不得手なのか。その理由を、思想というものの本質に遡って考えてみたい。

＊

一九八〇年代から、我が国はポストモダン思想の時代に入ったと言われた。フランスなどの現代思想を紹介する書物が、おびただしく店頭にあふれた。ポストモダン思想を語らずに現代を語ることなどできない、と思われるほどであった。

このように、一見したところ、我が国には思想が咲きこぼれているかのようである。

### 商品のように輸入して消費

最も新しい思想が、すばやく我が国に紹介されて流行する。思想もいわば、一種の商品として消費されている。これは無論、我が国が消費社会の階段を昇り詰めたことと無関係ではない。

しかし、思想の営みは、消費社会の原理と両立しがたいものである。

消費社会とは、耐久性を軽視する社会のことだ。私やあなた、一人ひとりの個人が消費者として、社会のばらばらな焦点になる。その周囲に商品が配列されていく。どの商

品も、ひとりの消費者のためにだけ存在し、彼の気まぐれと運命を共にする。消費者の欲望や突然の思いつきにより、商品は購入され、そして廃棄される。消費者の欲望は、消費者の生命の営みより永続するはずもないから、彼の死とともに消滅してしまう。ゆえに消費社会においては、どの商品も、消費者個人の生涯を越えて存続するとは想定されていない。あらゆる商品や情報が、またたく間に社会のすみずみにまで行き渡り、そして消えていく。その目まぐるしい回転が、消費社会の運行を司る。

思想も、商品となってしまえば、このような消耗の運命を免れない。

けれども、思想とはもともと、人びとの共通の枠組みであった。個々の人間の生き死にを越えて永続する文明の枠組み、それが思想であった。一人の人間がどれだけのものを消費できるか、その許容範囲は、文明の枠組みのなかで与えられるにすぎない。とすれば、思想は本来、個々人の気まぐれによって、商品のように手に入れたりするものではないはずである。

近代以前の社会では、伝統や慣習や習俗が、このような枠組みを与えていた。そこには、我々の先祖の知恵（もしくは思想）が隠されていたはずである。けれども我々は、近代を迎えるとともに、それらを言葉に置き換えて、思想として手元に残す代わりに、それをあっさりと投げ捨てる道を選んだのである。

このとき以来我々は、自分たちを共通につなぎ止める枠組みを、自分たちの思考によって選び取ることができずにいる。日本の法律も、制度も、その他の知識も、出来上がった形で外国から持ち込まれたものばかりである。その際我々は、最も新しくて進んでいるものが最もよいものである、という根拠のない思い込みに支配されていた。この幼稚な思い込みから、思想の名に値する堅固な構築物が生まれるはずもない。

＊

これは、よその文明を模倣する、遅れて来た社会の宿命だろうか。

そうかもしれない。しかしそう言ってすませられるのは、模倣が有効な間だけであろう。九〇年代は、我々の思考の力によって、文明を新しく築き直そうという時代なのだ。どこかに出来合いの解決が転がっているのではないかという、安直な昔ながらの発想と縁を切り、自力で前進する新しい知のスタイルを身につけなければならない。

## 2 思想のマナー

父祖代々住み継いできた家屋敷は、厳密な意味では、今の所有者の所有物だと言えないだろう。それと同じように、思想もまた、特定個人の知的活動の産物ではない。思想は、多くの人びとを、いわばその屋根の下に生活させて





いる、持続性のある言説である。思想は、人びとの協働作業で維持されている。人びとの間の信頼が、その作業には不可欠である。

思想を支える個々人のささやかな努力の領分を、思想のマナー、と呼ぶことができるだろう。めいめいがこのマナーを守ることによって、思想は生まれ、成長し、その本来の機能を果たすことができる。

＊

たとえば、こういうことだ。

A氏がいま、あるよい考えを思いついたとする。彼は、その考えを練りあげ、きちんとした言説のかたちにのべた。すると、A氏の言い分を聞いたB氏が、その主張に共鳴して、それを自分の思考や行為のなかに取り入れた。――こういう協働作業が、思想の最も一般的なあり方である。

A氏とB氏は、直接の知り合いでなくても構わない。時間的、空間的にどれほど隔たっていても構わない。それでも一緒に思想を担いうる。

**はしづめ・だいさぶろう**　東工大助教授（社会学）。一九四八年神奈川県生まれ。東大文学部卒。同大学院博士課程修了。著書に、『現代思想はいま何を考えればよいのか』『言語ゲームと社会理論』『冒険としての社会科学』など。

## 二通りの信頼が呼応して

こうした協働作業が可能であるためには、最低限、次のような二通りの信頼が呼応していなければならない。

(1)自分たちが従うことのできる、かなり一般性の高い言説を、誰かが、語ることができるという信頼

(2)自分がかなり一般性の高い言説を述べれば、他の人びとが、それに従うであろうという信頼

第一の信頼があればこそ、B氏はA氏の語った言葉の中から、思想として汲み取れる内容を探し出そうとする。第二の信頼があればこそ、A氏は自分の考えを、自分の置かれたさまざまな制約から切り離して、一般的な主張に高めようとする。この二つの努力が嚙み合ったときに、思想が成立する条件が生まれる。

社会の共有財産である、言葉に対する敬意――それが思想の、最低限のマナーなのだ。

＊

思想は、どのようにして、その持続性、耐久性を獲得するのか。

まず大切なのは、自分を取り巻く状況を、個人的事情を越えた、一般的、客観的な状況として記述することである。自分をある共同社会の一員として位置づけ、そうした人びとが置かれる必然的な状況として、自分の体験を理解

する。そしてそれを、言語化する。そこではじめて、ある人の思考の結果が他の人びとにとって、有意味で利用可能なものになる。さもなければただの怨みつらみにすぎなかったものが、知恵に高まる。

　各人の体験に、このような一般的表現を与えることは、もともと言語の性能であった。だからこそ言語は、誰にでも理解できるものなのである。思想は、こうした言語によってしか表明できない。

### 個人的事情に左右されない客観性

　文字が現れて、誰もが言葉を書き記すことができるようになると、思想に備わっている客観性が、一段と際立つようになった。ある人間の思考を、何の縁もゆかりもない第三者が、手に取るように知ることができる。多くの人に読み継がれる思考の回路こそ、思想の名に値する。こうしてついに、個人的事情に左右されない客観性を、思想が獲得するのである。

＊

　思想にとってもうひとつ大事なのは、いまのべた点と関係するが、後の時代に生き残っていくだけの、通時間性をそなえていること。

　誰しも、さまざまな利害関係に取り囲まれている。人間がものを考えるのは、さまざまな利害や力関係が錯綜するただなかにおいてだ。利害関係に密着した思考は、そこを離れるとまったく意味をなさなくなってしまう。

　利害関係は、変化しやすいものである。人間には寿命がある。圧倒的な力を誇っていた集団も、時とともに勢力が弱まり、最後には消滅する。時が経過すると、利害関係はまったく別のものになってしまうのだ。

　思想は、利害関係から独立した価値や原理を表明する。単なる利害でなく、利害を越えた価値や原理に訴えることで、思想は、人びとを巻き込んでいく。これがうまくいった場合に、時代を越えた、通時間的な妥当性を獲得できる。

＊

　生身の人間が、このような持続的・普遍的な言説を担わなければならないので、思想は個人に大きな負担を強いる場合がある。たとえば、自分がコミットした思想が正当な理由もないのに否定されそうになったときには、自分の全存在をかけて守らなければならないこともある。少なくとも、そういう人間がいないと、その思想は存続できない。場合によっては、命がけの困難も辞さないのが、思想を支える者の倫理である。

　言葉は、身体に比べれば、永続する（permanent）。身体は言葉に比べれば、はかない（temporal）。このギャップが、思想の困難の根源なのだ。

　人間はしばしば、永続する思想のために、身体を犠牲にする。逆に言えば、身体をそのように処することによって





はじめて、永続する言葉（価値や原則）への帰依を表明することができる。思想を担うとは、そうした身体の処方を覚悟すること、すなわち命がけの行為のはずだ。

＊

　ところで思想は、誰でも参照可能な書字テキストに書き記されるようになると、ますます合理的で体系的なものになっていく。

　書字テキストのかたちになっていれば、ある言明と別の言明の関係を問題にするのも簡単だし、全体として論理が一貫しているかどうかを考えるのも簡単だ。多くの人々が、そうやってテキストを操作していけば、テキストの論理的な組み立てをどんどん研ぎすましていくことができる。思想は少しずつ、そのかたちをなしていく。

　これを逆に、思想の自律的な運動と見てもよい。思想は、言語のかたちでさまざまな人間のなかを通過し、その本来の可能性を開花させていく。思想は、社会のなかの、個々の人間を越えたもうひとつの主体のように、その枝葉を拡げていくのである。

## 3　絶対的なものとしての思想

　時間・空間を隔てた多数の人間たちが、共通に帰属する（言語的に表現された）枠組みが、思想であるとのべた。

　思想を、機能の面から見れば、多数の人間の生存を可能にしているところがポイントである。思想は、首尾一貫していて、矛盾のないものでなければならない。その思想に従うかぎり、多数の人間が互いに衝突したり殺しあったりすることなく、各人が正しいと信じるやり方で生きていけると保証する（少なくともその、原理的な可能性を与える）ためである。思想は、人びとがよりよく生きるためにこそ存在する。

　この機能を果たすため、思想は歴史上まず、がっちり固定した言説の制度、すなわち、法や宗教のかたちで、古代に出現した。個々人を、自由な可動点にたとえるなら、思想は、それらの点の衝突を防ぐ、不動の枠である。個々人は、真の意味で自由になるために、この枠を信じ、そこに共同で帰属した。

＊

　けれども、このことが原因で、新たな問題が生じる。

　思想はたしかに、ある範囲の人びとの間に調和をもたらす。けれども、別の思想を奉じる人びととのあいだに、かえって対立を生じさせる。しかもその対立は、思想が明確で強力なほど、深刻なものとならざるをえない。

　思想の対立を、どう調停するか。どう解決するか。どんな思想も、それを奉ずる人びとにとっては正しいのだから、この解決は容易でない。

　この対立は、民族紛争と似ている。異なった生活様式の

人びとが、どうやって一緒に暮らせるかが問題になるのが民族紛争だ。違うのは、民族が血統と結びついた伝統で選べないのに対して、思想のほうは選択できる（と信じられている）ことだ。だから、思想の対立を調停するために、もっと上位の思想を持ち出すというやり方も考えられる。後者は、前のふたつの思想を包括する、より高度な思想と言えよう。

＊

思想が、より高度なものに成長していくのは自然だが、それが問題の根本的な解決になるとは限らない。高度な思想ほど、普遍性が高く、したがって、そこから抜け出るのも難しい。高度な思想ほど、人間を絶対的に拘束する。その結果、高度な思想同士の闘争が始まると、まえよりいっそう厳しく対立することになりがちである。

## 「絶対唯一神」の大きな影響

はじめは民族的な出自と分かちがたく結びついていた思想が、互いに競合しているうちに、多くの民族に共通な「大思想」に成長していく、というようなことが、文明の中心地域では実際にしばしば起こった。ギリシャの数学と論理学、ローマ法の体系、インドの哲学、中華帝国の統治システム……は、いずれもその例である。なかでも、後代にとりわけ大きな影響を残したのは、ユダヤ＝キリスト教の「絶対唯一神」の観念であろう。近代の思想は、すべてここを通り抜けた。そして、人間の自由な思索が、絶対的な存在とのあいだに孕む緊張を、思想の内部に取り込んだ。

＊

ユダヤ教、キリスト教（もちろんイスラム教も）の神は、人間に対して絶対的な支配力を持っている。人間の側からは、まったく神に対して働きかけることができない。完全に一方的な関係だ。

この神と、人間が契約を結んだ。それは、言葉（『聖書』）のかたちで書き留められている。この神聖な契約（法）を順守することが、宗教の主題であり、人間の義務である。人間社会のあり方も、この法に定められていて、人間の都合で変更することができない。逆に言えば、自分たちを律する枠組みを、恣意的に変更しないということを表現するために、神の存在を要請したのである。

絶対的な存在である神は、思想が高度であることを表現するのに都合がよい。神は、人間を超越した社会外的な実在である。神は、目に見えないが、人びとがその存在を前提して振る舞えば、社会的に実在し始める。

神を信じる人びとにとって、この世界のすべては、神の意志に従っている。神は、人間社会の制約に束縛されないから、民族からも自由だ。だからこそ、民族宗教として出発したユダヤ教は、その出発点を克服して、キリスト教やイスラム教に発展していった。そして、それ以前の伝統的





な社会が有していた思想を解体・吸収して、統一的な枠組みに組み直していった。

＊

我々近代人は、思想を、宗教と対立するものと考えがちである。民主主義のような政治思想も自然科学も、教会の権威との闘いを通じて、ようやく確立された。だから、宗教を、思想の典型的なかたちと考えることができにくい。

宗教から分離し、宗教と無関係になっていることが、たしかに近代思想のメルクマールであろう。でもいったんは、絶対神をいだく宗教が、近代思想を生み出すかけがえのない母胎となった事実を忘れるべきでない。さまざまな現象の全体、すなわち世界を、合理的に説明しようとする自然科学。すべての社会秩序を、人間的な価値観のうえに基礎づけ直す政治思想。どちらもキリスト教との激烈な闘争の過程で、キリスト教に匹敵するか、それを上回るだけの「絶対」の観念を手に入れた。それは、何びとにも（神によってさえも）動かしがたい客観的な事実や法則があるという信念や、人民の意志が主権をもった国民国家を構成するといった観念にかたちを変えて、近代思想のなかに生き残っている。こうした遺産を継承することで、西欧から出発した近代文明は、全人類を事実上巻き込む唯一の普遍思想に発展したと、主張しているのである。

＊

このような近代文明が、「絶対」の観念を知らない非西欧圏の社会に受容されると、さまざまな問題を生じる。我々の困難も、こうした事情に根ざすものだと考えられる。

## 「絶対」を避けてきた日本社会

日本にももちろん、それなりの思想伝統があるにはあった。けれども日本社会は、「絶対」の観念を生み出すことを巧妙に避けてきた。法や宗教的戒律のような規範的な言葉によって、自分たちの社会に形を与えることもしてこなかった。「絶対」というものを操作する技術が欠けているために、思想を営むマナーに問題を生じる。

日本の思想伝統と、外国から伝わった近代思想の原理とがうまくマッチしないために、日本では、一種の〝思想の貧血症〟が起こっている。思想を自力で生み出すことができないので、つぎつぎと最新の思想を輸入紹介しなければならなくなるのが、思想の貧血症の症状だ。文学思想であれ、政治思想であれ、その他の思潮であれ、このような変則的な思想のあり方を免れたものはなかった。間断なく輸血を繰り返していないと、考えを先に進めることができない。けれども、間断なく輸血を繰り返しているせいで、思想が思想であるための最低限の条件が満たされなくなる。進化論、マルクス主義、実存主義、構造主義、ポスト構造主義……と続く、この百年あまりにわたる日本の輸入思想の系譜も、そのようなものではなかったか。

日本人の思考を、思想と呼ぶにはどこか足りないものにしているのは、言葉で語り切れない深層に働く、特有の社会技術である。これがどう作動して、思想の成立を困難にしてしまうのか、掘り下げてみるとしよう。

## 4　戦後民主主義の失敗

昭和二十年＝一九四五年の敗戦を境に、日本は新しい歩みを始めた。戦後改革を進めたアメリカの希望的観測によれば、日本社会には、民主的な憲法が定着し、法の支配が貫徹して、自由主義陣営の一翼を担う国家が育っていくはずだった。

一面では予測を上回って、日本の戦後改革は成功した。だが別の面から見れば、それは、戦前の社会にあった、思想を生み出すためのわずかな手がかりさえ失われてしまう、という過程でもあった。アメリカと価値観を共有する国家を育てようという企図は、果たされなかった。

八十年代以来の日本は、消費社会のまっただなかにある。

この状況こそ、戦後日本がひたすら生産力を増大させ、経済的な繁栄を求めてきたことの結果である。そして、経済のことしか考えなかった戦後の日本を可能にしていたのは、超大国アメリカの「大外護」であった。日本はこれに慣れ切って、それが偶然の所産であることを、よくわかっていない。

＊

ＧＨＱによる戦後改革は、新憲法を頂点とする法の支配、民主主義社会への移行をもたらしたというイメージが一般的である。だが、サンフランシスコ講和条約が発効するまでの六年あまり、日本がＧＨＱの統治下にあったことは、まぎれもない事実だ。ＧＨＱは、国内法に優先するいわば「超法規的な存在」として、戦後日本社会に君臨した。そして〝日本株式会社〟の基礎づくりに手を貸すことになったのは、ウォルフレンの『日本／権力構造の謎』の指摘する通りである。

ＧＨＱの戦後改革は、結果から見れば、きわめて平等な日本社会を生み出すのに、一役も二役も買った。占領軍はまず手始めに、主要財閥を解体し、官僚の経済統制を強化した。また、農地解放によって、膨大な小規模自作農を生み出した。こうして出発した戦後社会は、経済の高度成長の過程を通じて、稀に見る〝総中流〟社会を作り出した。企業の〝過当競争〟は官僚によって、厳しくチェックされている。明治の企業家精神は影をひそめ、大卒能吏型の人間が企業グループを管理している。年功序列、終身雇用に代表される〝共同体〟原理が、企業社会に定着していった。

この結果、日本社会はかつてないほど、均質で一様な社会になった。実態はともかく、日本は平等な社会でなければならないと、ほとんどすべての日本人が信じるようになった。江戸時代の武士階級、明治時代の指導層といった、日本のリーダーシップを担った責任階層（指導者たちの一群）が姿を消し、代わって、すべてを根回しと慣行（惰性）によって処理すればよしとする、農村的な行動様式の人びとに、日本社会のあらゆる場所が占められてしまったのである。

＊

もう少し、具体的にのべてみよう。

①政治は、自民党の派閥政治に典型的な、日本型合意の政治。政策形成と意思決定のためではなく、利害調整と既得権擁護のための政治である。

②経済は、官僚のコントロール、株式の持ち合いによる日本型資本主義。そこでの至上命令は、利潤の極大化である以上に、長期的なシェア拡大を通じての企業グループの存続である。

③教育は、偏差値教育と学校歴社会。他人と同じ能力・知識を身につけることを強調し、社会の一様性を極端に増幅していく。こういう教育を受けた学生たちが、自分を表現するのが不得手になるのは当たり前だ。

### 農村の勤労倫理を近代工場に

――こういうプロセスを通じて、超平準社会・日本の目に見えない構造（ウォルフレンによれば〈システム〉）が再生産されていく。

戦後日本の奇跡と言われる、生産力拡大の秘密は、このような社会変化によって可能になった。日本社会にいちじるしいダイナミズムをもたらした、戦前～戦後を通じる巨大な変化を、〝昭和の大動員体制〟と呼べると思うが、それは、日本人の行動パターンを一様化し、その予期可能性を著しく高めた。その秘密は、きわめて労働集約的な農村の勤労倫理を、近代工場に移植したところにある。工業製品は、農作物と比較にならないほど種類が多いが、それを農作業の場合と同様の、一様な勤労のエートスで生み出そうとするわけだ。

＊

日本のこのような、高度工業化社会への移行は、目ざましい〝成功〟を収めたのであるが、反面それは著しい〝歪み〟をもたらした。特に、その経済的実力に見合う社会制度を構築できていない点が問題だ。政治制度を運営する能力は特に未熟なままである。戦後民主主義は成功しなかったと言えるだろう。

合意／選択を、政治的な意思決定の二つのタイプとすれば、日本は前者の典型である。

選択は、本質的に言って、判断である。いろいろな事情を考慮した上で、こうしようと誰かが決断する。選択はまず、個々人の判断から出発し、つぎに、それが集まって社会的な選択となる。たとえば議会制度や投票制度は、その

　それに対して合意は、集団を優先する。合意の手続きの場合、合意に先立って個々人は意思決定を行なわないのがふつうである。個々人は、自分なりの利害を持っているだろうが、それを、まず自分の意思決定（実行可能な行為プラン）のかたちにしようとはせず、いきなり他者との妥協可能性を探り始める。それは、本当の意味では、妥協でさえないと言えよう。合意もたしかに選択であるが、それは個々人の選択にもとづかない、あくまでも集合的な選択なのだ。

　こうした社会は、過去にとらわれない判断が必要となる場面では、たちまち問題を引き起こす。個々人が決断し、それを集積して社会全体の決定を導かなければならない場合、まったくそれが機能しないのだ。個々人は、およそ意思決定をするように慣らされていない。

## 5　日本社会のミクロ分析

　日本人が、責任ある意思決定を下すことができない原因を明らかにするため、日本社会の組織や集団の内部メカニズムを詳しく考察してみよう。

　日本人の意思決定のタイプは、全員一致型である。

　全員一致は、多数決とは異なる。多数決は、一人ひとりが独立に意思決定を行ない、その後でその結果を集計して、ある組織や集団の意思決定とするという考え方である。ここで何より大切なのは、一人ひとりの意思決定であり、それが変化すれば、全体の決定も覆る、という構造になっている。だからこそ、多数決は、民主主義の制度の基礎になるのだ。

　それに対して、全員一致は、必ずしも一人ひとりの意思決定に基づかない。全員一致の場合重要なのは、全員が意思決定に参加したという事実なのであり、それ以上のことではない。したがって、これは、容易に一種の儀式に変化する。一人ひとりの意思決定よりも、集団全体の意思決定の方が優位するというのが、全員一致の考え方である。

　日本の社会が重視する「合意」とは、この全員一致があったことを信じようとする態度にほかならない。そこでは、一人ひとりの考え方の違いや、異なった意思決定のあり方よりも、考え方の共通点が強調される。

＊

　合意を重視する日本社会は、組織を運営する上で、いくつかの原則を編み出した。これらの原則は、すべての日本人にはっきり意識されているとは限らないが、かなり厳密に守られていると思われる。

　第一の原則は、「妥協可能の原則」である。この原則は、どんなに意見の異なった人同士でも、じっくり議論を重ねれば、必ず一致点が見つけられる、という信念である。この信念は、よく考えてみると根拠がないが、日本人は、相





手をどこかで〝同類〟と考えているので、このような信念を持っているのが普通である。

### 自分の意見は他者と相関的

　一致点を見つけるためには、自分もどこかで、相手に歩み寄らねばならない。妥協することは、自分の意見を持つより先に、すでに織り込みずみである。だから、厳密に言うならば日本人は、相手の意見と無関係な自分だけの意見というものを持たない。相手との関係が測られなければ、自分の意見というものも成り立たない。自分の意見は、他者と相関的である。一人ひとりの意思決定よりも、集団の意思決定の方が優先する、というのはこのようなことである。

　これと関係する第二の原則は、「同席者優先の原則」である。この原則は、不在者の権利を認めないこと、と言い換えてもよい。

　近代法の原理原則から言うなら、ある人間の権利は、彼がその場にいてもいなくても、いささかの変更も受けない。ある人の権利が、いったん社会的に承認されたなら、彼が不在であるからといって、それを別な人間が否定することはできない。この意味で、権利は一般性があり、抽象的である。

　これに対して、日本的な意思決定のモデルでは、誰がその場に出席しているかによって、結論が違ってくる。一人ひとりは、その場に出席している相手との合意を優先して自分の意見を決めるので、当然このような結果になる。集団的な意思決定も、一人ひとりの意思決定と同じように、状況依存的である。ある組織や集団が、一定の期間のあいだに何を決定していくかは、メンバーの交代とともに緩やかに変化していくので、その全体をある原則によって誰かがコントロールすることはできない。集団の意思決定は、長期的に見れば、不合理で支離滅裂ということになる。

　第三の原則は、「既得権不変更の原則」である。この原則は、同席者優先の原則のコロラリー（系）として導かれる。

　日本ではどんな組織や集団も、その場に集まった人びとの利害を離れた、上位の主体や合理性を体現することができない。また、そうした主体や合理性を代表する人物が存在できるとも考えられていない。ゆえに、その場にいる人間の死活的な利害を否定する決定を、下すことができない。既得権を保持している者がその場に居続ける限り、それを否定することができない。

　こうした意思決定のメカニズムのもとでは、これまでの方向を一八〇度転換する大胆な改革など、行なえないのは当然である。なぜならばそこには、理念が欠けているからだ。そして、たまたま現在そうであるという〝現状〟と、本来そうであるべきだという〝正当性〟とをきちんと区別することもできないし、たまたまそこに居座っている〝占

有〟と、本来の〝権利〟とをきちんと区別することもできないのである。

＊

以上の原則から導かれる第四の原則は、言葉や原則に拘泥することを正当化しないという原則、すなわち「言語無効の原則」である。この原則は、すぐわかるように、〝原則を否定する原則〟という、矛盾したかたちをそなえている。したがって、このことを論理的に主張できるわけではないのだが、私の観察によると、人びとはこのように行動しているとしか考えられない。

なぜ原則を言葉のかたちで確認することが嫌われるかというと、その結果、意思決定が状況に依存しなくなるからである。妥協のきかない原則が、目に見えるかたちで表されてしまうことは、合意の妨げになる。

日本の組織や集団で、〝人格者〟(その集団のノーマルなメンバー)であることがどうやって認定されるかというと、それは決して、何らかの一貫した原理原則に忠実であるからではない。そうではなくて、その集団の他のメンバーが一人ひとり何を考えているかを気配りし、よく理解していることである。それを踏まえて、その時々に応じた適切な行動を取りうることが、最も大人らしい態度だとされる。これは、日本の組織や集団で、リーダーであるための条件だと言ってもいい。

そうだとすると、個人の言動を時系列のなかでたどっていっても、何らかの原理原則に忠実な信念の軌跡を取り出すことは期待できない。特にその個人が、組織や集団に深くコミットしている場合ほどそうである。そして、どんな組織や集団にも加わらないような個人は、日本ではほとんどその存在が評価されないのである。

以上のようなさまざまな原則の積分的な効果として、日本は、目に見えるかたちの明確な思想を生み出してこなかった。その背後には、いまのべたような、組織や集団のミクロな力学が働いているのである。

## 6 思想とは責任を取ること

思想とは、知識でない。

思想とは、個々人の下す判断であり、行動である。

したがって、その思想を生み出す源は、その人の内部にしかない。決して、その人を離れたどこか外側にはない。

ある思想が間違っていれば、それは、その人の考え方が間違っていた、ということだ。それはその人が悪かったのである。思想を生み出した人間は、自分が生み出した思想に対して、責任を持たなければならない。もしも他の人間たちが、その思想のどこかがおかしいと文句を言ってきたら、確かにおかしいとか、いや正しいとか、ちゃんと応答しなければならない。「応答しなければならない(responsible)」ということこそ、責任の本来のあり方である。





自分の口から出た言葉に責任を持ち、言葉に表現された自分の思考に責任を持つ。ここに思想の基礎がある。思想とは、言語の個人責任の制度である。この責任を、喜んで引き受けようという個人が大勢現れたときに、その社会は、その名に値する思想を持つことになる。

＊

ところが、日本社会のミクロな力学は、言語の個人責任を解除する方向に働いてしまう。そして、思想のあるべき倫理とは正反対の、無責任を蔓延させる。

この無責任は、二つのかたちをとった。

第一のかたちは、「テキスト外来主義」とでも呼ぶべきものである。

### 優れたテキストとしての思想

信頼すべき思想の産物、すなわち優れたテキストは、国外からやってくる。それは、日本社会の内部で紡がれるはずがない。――このような抜きがたい固定観念が、永らく我々を捉えてきた。仏教のテキストも儒教のテキストも、西欧思想のテキストも自然科学のテキストも、第一級のテキストはすべて海の向こうからやって来た。日本人は、このようなテキストを生み出せなかった。これは経験則にすぎないはずなのに、いつの間にか先験的な命題にすり変わってしまっている。

第二のかたちは、「権力解体主義」とでも呼ぶべきものである。

あくまでも合意を追求する日本の組織や集団は、誰かある個人が判断して集団の決定を下した場合でも、そのことを隠そうとしてきた。誰かの個人的な意思決定であるなら、集団全体の合意ではありえない。誰かの意思決定によって、その集団が動かされるなどということは、本来あるべからざることだと考えられているのである。

この結果、日本の社会は、目に見えるかたちで権力が行使されることを、忌避するようになる。どんなかたちであれ、誰かが権力を握ることを、喜ばない。こうした傾向は、制度上当然権力を握るべき人物が権力を握っている場合にも、やはり根強い。

権力を行使する当の人物が、権力を行使した(意思決定を行なった)ことを否定し、それどころか自分でもそのことを意識せず、それに責任を持とうとしなければ、そもそもその権力の行使を正当化するための言論も必要なくなる。思想というものは、明確な意思決定を行なうためのものなのだが、日本社会のなかでは、その必要性がミニマムになっている。

＊

日本社会のなかでも、もちろん意思決定は行われる。けれども、それは、個人一人ひとりの責任ある意思決定の積み重ねという、煉瓦造りのような構造を持たずに、組織や集団の機能的な要請を探り当てる相互調整のプロセスに解消

してしまっている。意思決定を下したことの重みは、集団のメンバーに均等にかけられ、その実、その誰ひとりとしてその責任を分担しようとしない。形のない「無責任」の圧力となって、意思決定のひとつひとつが、目に見えなくなるように抹消されている。明示的な意思決定には、責任ある正当化の言葉がともなうはずだが、この見えない意思決定には、言葉の不在（無責任）がともなっている。

### 思想生成阻む政治の貧困

日本社会は総体として、こうしたおびただしい無責任（言葉の不在）の泡つぶを、不断に生み出している。見方を変えるなら、それは、責任転嫁も求める集団的な圧力にほかならない。責任はつぎつぎに転嫁されつづけ、最後に、あらゆる責任を引き受けてうやむやのうちに呑み込んでしまうブラックホールのような装置——天皇に到達する。

天皇は、明示的・積極的に語られる思想の、対極的な存在（言うなれば、反思想）である。日本の社会が、有史以来こうした存在を手放さなかったことと、見るべき思想が成立しなかったこととは、裏表の関係にある。日本の組織や集団は、天皇との距離を測ることをもって、自分たちの存在を正当化することの代わりとしてきた。そしてそれ以上、社会の現状を正当化するための言説を編み出さずにすませてきた。それゆえに、政治は貧しい。思想の貧しさとは、こうした政治の貧しさの帰結ではないのか。

## 7　社会技術を思想に高められるか

それでは日本人は、まったく思想を持たないのであろうか？

日本人は決して、無思想なわけではない。その思想の肝腎な部分が、暗黙なだけである。暗黙なままの思想は、西欧的な規準に照らせば、思想とは言いがたいであろう。しかし日本人は、これもやはり思想であるという感覚を持っている。

日本人は、客観的かつ公平に見て、かなり高い倫理性をそなえている。その倫理性とは、自分が帰属する集団への忠誠心であり、その集団への一体感に裏打ちされている。日本人は、集団の機能的要請を優先させて自分を犠牲にするという発想法に慣れており、そこにある種の美を感じさえする。

問題は、この倫理が、状況依存的なものでしかないことだ。彼の行動は、状況を共有する人びと、すなわち同じ集団のメンバーには理解されるが、そうでない人びとには理解されない。集団の外側の人びとにとっては、彼の行動は、必ずしも倫理的であるとは映らない。このような倫理を、厳密な意味で倫理と呼びうるかどうかは問題だ。

日本人が、自分たちの行動原則や倫理的な規準を暗黙のままに放っておくのは、日本人の思考や行動が状況依存的であることと関係がある。もしそれらを明確な言葉で語ってしまえば、その場その場の特有な状況が破壊されてしまい、そこに賭けられていた倫理性もまた破壊されてしまうからである。

思想とは、言葉の用法である。ならば、言葉づかいを洗練する方向に、思想の第一歩を踏み出すしかなかろう。

日本人の言葉の用法は、これまであまりにも、状況を共有する人びとの間で合意を調達するためのものでありすぎた。言葉の本来の性能にたちかえって、状況を共有しない人びと、すなわち、「自分たち」ではない人びとのところへ届く言葉に組みかえるべきなのだ。それには、状況に依存しない定義の明確さ、構文の明快さ、倫理の一貫性を大事にしていく必要がある。日本語の中でも、こうしたことは可能であり、十分に実行できるはずだ。

### 言葉の用法に対する忠誠に

自分の帰属する集団に対する忠誠を、言葉の用法に対する忠誠に置き換えること。日本の思想は、ここから始まるべきである。

＊

我々にとっての思想的課題とは、つまるところ、自分たちの暗黙の前提を明らかにする言葉を発見することに尽きる。言葉に表すことで、その前提が、目に見えるもの、思考可能なもの、疑いうるものになる。前提が暗黙であるあいだ、それは自分の一部であるが、それを言葉に表現すれば、自分と切り離せる。自分の前提を絶えず疑い、自分の拠って立つ集団の前提を問い直すことは、自分を再定義する作業に等しい。新しい自分を発見するために、こうした作業は不可欠なのである。

現在の日本語は、過去の日本人の思考や伝統の所産であるから、それらに制約されているのはもちろんのことだ。けれども日本語は、翻訳可能である。すなわち、言語である以上、日本の伝統をまったく共有しない人びとにも理解可能な論理構造をそなえている。集団中心的に振る舞うわれわれ日本人の行動様式を、この日本語でもって、できるだけ客観的に記述すること。このことは、当然日本の社会に少なからぬ影響を与え、我々自身の行動様式をも変化させずにはおかないはずだ。

＊

ここで重要になるのが、「情報」という技術をマスターすることである。

日本の社会技術は、日本でしか通用しないものである。それは、互いの前提を暗黙のままにしておいて、相互に合意の可能性を追求する技術だった。そこでは、誰がどのような意見を持っており、誰がどのような事実を知っているかは、とうとう不確定なままである。また、誰がどのような根拠にもとづいて意思決定を行なうかも、最後まで明示

されない。

情報の技術は、言うならばこの対極である。それはまず、①事実と意見とを明確に分離するところから出発し、②世界のなるべく正確で客観的な像を描き、③実現すべき価値目標をはっきりさせ、④しかるのちに意思決定を行なう、という戦略的な構造をそなえている。そして、そのすべてのステップで、言葉が重要な役割を演ずるのだ。

国際社会は、文化的伝統や価値観や宗教や社会体制を異にする、さまざまな社会で構成されている。これらの国々が、意思疎通をはかり、国際的な合意を形成していく上で、情報の技術に立脚した合理的な意思決定の積み重ねが前提となることは言うまでもない。日本社会もまた、国際社会の一員として、その責任を果たしていく義務がある。政府、経済界、学界、ジャーナリズムなど日本の対外セクションが、情報の技術に立脚して、国際社会のフォーマットに従った行動ができるかどうかが問われている。

ところがこれらのセクションは、国際社会の一員である以上に、日本社会の一部である。国際社会と日本社会に二重に帰属するという矛盾を抱え、しかもこれまでは、主として日本社会に対する忠誠にもとづいて行動してきた。そのため、国際社会の不信を買っている。日本人が、自分を語るに足る思想を持たない間は、ここから脱却できる見込みは少ない。

＊

情報とは、言語による自己コントロールの方法論である。あるいは、別な言い方をすれば、危機管理の方法論である。政治やジャーナリズム、あるいは広い意味での学問も、この危機管理を課題にするものだと考えてよい。

危機管理とは何か？　最悪のケースでも、最善の対応をすること、それが危機管理である。それには事前に、危機のリスト（考えられるさまざまなケース）を想定して、そのそれぞれの場合にふさわしい行動プログラムを準備しておく必要がある。合理的な意思決定とは、すべて、このような危機管理としての条件を満たすはずだ。

危機管理の根本には、人間の想像力がある。自分の置かれている状況をよりよく理解し、それが変化しうるものであることをよくよく認識することが要求される。

## 危機の可能性を本能的に恐れる

危機とは、端的に状況が変化することにほかならない。そして、こういう危機がありうるというかたちで危機を提示することは、過去の合意を覆すことに通じる。日本社会の合意は、集団の置かれた特定の状況を自明な前提と受け取るところから出発していた。ゆえにそれは、危機の可能性を、本能的に恐れる。本能的に恐れるゆえに、それを言葉に出して自覚することができない。日本の政治や、組織の意思決定の実態が、危機管理からほど遠いとしばしば言われるのは、このような原因によるものである。





思想は、現実を厳しく見つめるもの。現実のなかには、今後起こりうるあらゆる可能性も含まれる。自分に都合の悪い状況が起こるかもしれないと、事前に考えておくのは、健全な思考の働きだ。しかし日本の組織は、合意を達成するついでに、その副産物として、状況に対する楽観的な見通しを生み出してしまう。この見通しに束縛されてしまえば、現実は見えてこない。現実が見えなければ、思想だって成り立たない。

＊

こうした思想の困難は、心ある人びとには、おそらくずっと以前から気づかれていたことである。しかし、思想が生まれがたい状況をいくら理解したからといって、思想そのものが生まれることを保証できるわけではない。

ではどのような処方箋を講ずることが、一番の早道か？

それには、日本人の思考のバラエティー（多様性）を増やすことである。日本語のなかで可能な思考のパターンを数多く供給し、また人びともその多様性を享受する。そういったやりとりを始めることである。

思想家は、思考のパターンを人びとに供給する専門家だ。彼は、どの集団にも属さずに（あるいは最低限、自分の属する集団への忠誠心に毒されないで）、言葉の性能への信頼に生きることをする。思想家と呼ばれる人びとの存在を確保しておくことが、その社会の危機管理に通じるのであり、その社会の安全にプラスになる。

思想を生み出し供給する能力も、暇もない人びとは、思想を享受することで、思想家を支えるのがよい。思想を享受するとは、どのようなことか？　それは、自分と同じ思考をする人を発見することではない。自分と違った思考をする人、自分と違った発想に立ち、自分と違った結論を導く人を発見して喜ぶことである。自分の同類ではなく、自分と違った人間に出会って喜ぶことである。

思想の送り手と受け手とのこうしたキャッチボールが成り立つなら、思想は育ち始める。ひとりでも多くの日本人が、異質なものや、自分のもうひとつの可能性について興味を持つようになることが、そのカギになる。

## 異質の他者を念頭に行動すればよい

おそらく、ちょっとした工夫で、そうしたことが可能になるのではないか。たとえば、自分のいる集団の中にいつでも、自分のことを共感できない誰か、異質の他者が存在することを念頭において、行動するようにしてみればよいのだ。この異質の他者は、外国人であってもいいし、想像上の誰かであってもいい。ためしに、そうやってみることで、あなたは確実に変わるはずだし、日本もその分確実に変わるはずだ。

誰もが言葉を十分使って、人生をたくましく生き抜いていくこと。思想とは、それ以上でもそれ以下でもないのである。■